

親鸞聖人750回大遠忌

教育の現場で育てられ

(きたばたけ こうゆう)
北畠 晃融

中仏90年の歴史

親鸞聖人七百五十回大遠忌法要を二年後に迎えるにあたり、教団の一つの教育現場である中央仏教学院の歴史、現状から、今後の教育の一つの方向性を伺えればと思います。

学院は、大正九年に本願寺派立の僧侶養成機関として本願寺境内から出発し、昭和三年に、聖人の晩年にゆかりの深いといわれる角坊隣接地、現在の場所に移りました。第二次大戦時の一年の休講、二度の火災など一時は廃校も考えたという苦難の出来事も、多くの人々の尽力により乗り越え、ここ三十年の間に、教室棟、講堂、寮、図書館等が建ち、現在の形になりました。現在まで約一万四千人の僧侶が巣立ち、教団内外で活躍されています。

一方、社会情勢の変化にともない、教団は聖人ご誕生八百年を記念に、昭和四十七年から学院に通信教育制度を創設。いつでも、どこでも、だれでもが、生きるよろこびを見出せる浄土真宗のみ教えを、系統だててわかりやすく身につけられる通信教育が発足したのです。「私の生死を貫く教えを学ぶ」ところに多くの人々が喜び、現在まで三万人を超える入学者を数えています。

建学の精神

以上のような学院の歴史は、ただただ念仏に生きる人の育成にありました。学院には前門さま、門主さまより、「自信教人信」「学仏大悲心」の扁額をいただいておりますが、これこそが九十年の歴史を貫く建学の精神です。

……本願を信じ念仏を申さば仏に成る、そのほかなにの学問かは往生の要なるべきや。

……学問せば、いよいよ如来の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、……

(『註釈版聖典』八三九頁)

との聖人のお言葉を心に深くいただきます時、「学仏大悲心」とは、〈衆生をして往生せしめんとする仏の大悲を聞思する〉ことですので、単なる知識修得でなく、まさにこの私が如来の大悲の心を体解味得していく世界であります。しかも、この仏の大悲心を学ぶ念仏者の生き方は、自らが信を喜び、他の人々に伝えるという「自信教人信」につながりません。蓮如上人は親鸞聖人のお言葉を引用され、『御文章』に、

故聖人の仰せには、「親鸞は弟子一人ももたず」とこそ仰せられ候ひつれ。……如来の

教法をわれも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり。そのほかは、なにををしへて弟子といはんぞ……（『同』一〇八三頁）

と述べておられます。私が信じるのではなく、如来のはたらきそのものによる「自信」であり、「教人信」であることを教示くださっています。“私が教えたから私の弟子”などと人間の恣意をまじえながら伝えたり、弘めたりするものでないことを教えておられます。

育ちあう教育環境

この精神のもと、寺院・僧侶の本来のありようが身につくよう学院教育が行われていきます。毎朝、一時間の勤式・伝道実習での仏徳讃嘆ではじまり、真宗要説から書道等の実践まで十八科目、おのおの年間約三十時間かけての基礎から系統だてた僧侶教育が行なわれています。担任制のもとの細やかな教育も当然ですが、一番の特色は院生同士での育ちあいです。例年、五十歳も年齢幅の人々（平均約二十七歳）が、若人は年長者の経験を、年長者は若人のエネルギーを受けとめながらの共同学習、三・四名の留学生等、年令・経験・学歴・国籍を問わず、いろいろな人が一つの教室で仏の願いを聞き、心豊かな僧侶として育ちあっております。事実、ここ十年来、入学者の約半数が得度済みの上で入学してきますが、まさに、如来を中心にした日々の学びの中で、真宗僧侶として育ちあいたいとの願いでしょう。ネパールからの一留学生が帰国する時に、「学院の扉を開けた瞬間、泳げぬ私的大海原を眼前にしたようで逃げ帰ろうと思ったが、一年の学びで、学友や先生、何よりもお念仏にであい、今は一人でも多くの人が学院で学んでくれれば、世の中安穩になることと思います」と述べて帰りました。

このように、如来さま中心の教育システムの中、しかも年齢・経歴・国籍等を問わない人々が一つの教室で学びあい、育ちあえる方向性は、教団の教育だけでなく、今後の日本の学校教育のありようを考える上でも大きな方向性を示唆しているものと思います。

「生涯門法」する人の輪

一方、通信教育も、今後の教団の伝道性を考える上で、本当に大切なものと思います。通信教育発足後間もなく当時の豊原大潤総長が「通信教育は、人間不信と荒廃が広がっている危機の時代に相応した教育であると同時に宗門における新しい伝道方法です。……あらゆる場でみ教えに生かされる人が一人でも多くなったださることこそ、在家仏教としての聖人のみ教えの真髓……既存の寺院と一般人とをつなぐ教育であれば教団にとって大きな力……」という意味のことを述べられています。この方向性の実現にむけて歩んできた通信教育です。

一つは全国各地の人々が学びやすいように、北海道から鹿児島まで、事務局が出むいてスクーリングを受講してもらえること。また、一人での学習の困難さを少しでも克服でき

るように、別院・寺院等の協力もいただきながら、全国各地（三十カ所）に自主的学習会の「集い」をつくり、先生を囲み、通教生同士が語りあう中で学習しやすい環境がつけられていること。また、そのような自主的・積極的な学びを通して卒業した人々が、今後も生涯聞法をとの願いと、自分の味わったよろこびを後につづく通教生の学びに役立つ組織をとの願いから、これも全国各地三十カ所に同窓会組織が生まれ、活発に展開しています。

以上のような通信教育で学んだ人々から、仏恩報謝のお念仏の輪が広がっていくことが、寺院・門信徒と一般の人々とのかけはしにもなり、教団あげてとりくんでいる開教にも大きなエネルギーとなっていくのではと思います。

宗祖の大遠忌にあたり、ネパール留学生の「一人でも多くの方が学院で学んだら世の中安穩に」との言葉や、九十歳で通信教育を卒業された方の「この年になっていのちを聞かせてもらい有り難い、生涯聞法します」との言葉をいただきながら、報謝の行動にすすみたいと思います。

（中央仏教学院前院長）